

# 口なしの花

— 狩野友信と東京盲啞学校の教え子たち —

## Gardenia Blossoms: Kano Tomonobu and His Students at the Tokyo School for the Blind and the Deaf

山 田 久美子  
YAMADA Kumiko



狩野友信、東京盲啞学校、凸画、高津柏樹、横江榮雄、酒井なつ、小岩井是非雄

Key words: Kano Tomonobu, Tokyo School for the Blind and the Deaf, embossed painting, Takatsu Hakuju, Yokoe Shigeo, Sakai Natsu, Koiwai Zehio

### Abstract

KANO SHUNSEN TOMONOBU (1843-1912) was born the son of Kano Tosen Nakanobu, eighth head of Hamacho Kano School, and was appointed court painter to the then Shogun Iemochi in the last days of the Tokugawa Shogunate. He was commissioned to study western art with Kawakami Togai and Charles Wirgman, which resulted in his being appointed teacher of drawing (*gagaku*) at the new government schools after the Meiji Restoration, where this skill was needed to study western technology and sciences. Tomonobu met Ernest F. Fenollosa while teaching at Tokyo University Preparatory School, and this led to his appointment as teacher of Japanese painting at the newly founded Tokyo School of Fine Arts. Tomonobu had been teaching Japanese painting to deaf students since the early years of Meiji, and after resigning from the Tokyo School of Fine Arts in 1889, he taught at the Tokyo School for the Blind and the Deaf as an active member of the faculty until his death in 1912. This paper reports on the details of his days there as well as some of his students who became artists and art teachers.

狩野春川友信（1843-1912）は江戸狩野四家の一つ浜町狩野家第8代、狩野董川中信の長男として生まれ、木挽町絵所で修行後、16歳で將軍家茂により奥絵師見習いに任用された。幕府の命により幕末の開成所で川上冬崖らに洋画を学んだことから、維新後の明治3年に民部省図籍掛として新政府に出仕した。6年には文部省第一大学開成学校に出勤、続いて外国語学校兼勤、8年に東京開成学校教授補、10年に東京大学理学部教場助手となり、13年からは東京大学予備門で「画学」を教えるようになる<sup>1)</sup>。画学は医学をはじめとする西洋の科学技術の受容に必要とされたのである。来日して外国人教師として東京大学で社会学を教えていたアーネスト・F・フェノロサに請われて、狩野派の古画鑑定法を伝授し、他の狩野派絵師たちに紹介したことがきっかけで、明治22年（1891）開校の東京美術学校で狩野派の画法を教えることになる。これ以前から亡くなるまでほぼ一貫して従事したのが盲啞者の美術教育であった。本稿ではこの経緯について記し、狩野友信伝の最終章としたい<sup>2)</sup>。

## 1. 盲啞教育とともに

日本における盲啞教育は明治4年（1871）、工学頭山尾庸三が太政官に対して「盲啞学校ヲ創立セラレンコトヲ乞フノ書」により、その必要性を建白したのが端緒とされる。山尾は文久三年（1871）に長州藩から密かに英国に留学した五人の一人であった。在英中、スコットランドの造船所を見学した際に、聾啞者が健常者とともに工員として働いているのを見て感銘を受け、聾啞者の自立をみざす教育の必要性を痛感したという。山尾はのちに、吉田松陰の聾啞者であった15歳年下の弟繁三郎に対する愛情ある姿が記憶に残っていると語っている<sup>3)</sup>。明治8年（1875）には古川正雄、津田仙、中村正直、岸田吟香、それに宣教師のブルシャルトが慈善団体「楽善会」を組織し、翌9年山尾も入会して、宮中から金三千円が下賜となり、12年（1879）に築地の海軍用地に洋風建築が落成した。盲啞者のための学校、楽善会訓盲院は13年（1880）に開校したが、なかなか生徒が集まらず、15年（1882）に修業年限6年の学科課程を定めた際も、生徒数わずか盲生17名、啞生10名であったという。

訓盲院では明治16年（1883）に初めて図画を教授することになり、翌年には鉛筆画を導入、続いて水彩画、南宋画（南画）に改めている。17年（1884）12月に東京府に提出の開申書には「教授法要旨」画学科において「啞生に限り、四君子墨、花卉墨、花鳥淡彩、花鳥革画、人物等南宋画の法を以ってして又文部省印行の小学普通画学本に依って鉛筆法を加う」となっている。最初は田島定邦（号霞山）が南画を中心に教えていたが<sup>4)</sup>、18年（1885）訓盲啞院と改称して文部省直轄の官立学校となった当時の画学教師は淵辺遊萍であった。

明治19年（1886）に訓盲啞院の画学指導内容が南宋画から狩野派に変更になったとの記録があるが、この年1月狩野友信は文部省の図画取調掛に任ぜられ、3月には訓盲啞院兼務となっている<sup>5)</sup>。友信が囑託教員として聾啞生に教えるようになった翌20年（1887）1月以来、生徒の作品が東京府工芸品共進会スペイン万国博覧会油画展覧会および婦人慈善会に出品され、友信に

は連日出勤尽力に付き慰労金 8 円が交付されている<sup>6)</sup>。同年 10 月には、図画取調掛は東京美術学校と改称され、開校準備に当たる。一方、訓盲啞院は同年東京盲啞学校と改称し、友信は 21 年 6 月付で東京美術学校東京盲啞学校両校雇を申しつけられる。東京美術学校が開校した 22 年には東京美術学校雇となり東京盲啞学校は退職する<sup>7)</sup>。

東京盲啞学校は設備が充実して生徒数も増え、24 年（1893）に築地から小石川指ヶ谷の植物園に隣接する旧薬草試植物園跡地に移転する。尋常科、技芸科の二科からなり、技芸科で彫刻、指物、裁縫と並んで図画が教えられた。盲啞学校を退職した友信が、同校の図画教育を託したのが、幕末に狩野勝川院雅信の画塾、木挽町絵所で同門であった結城正明（1840-1904）である。東京美術学校でも教え、横山大観等を育てたことで知られる。28 年 10 月に結城正明は中風により共立女子職業学校で倒れ、右半身不随となり、翌 29 年 3 月に東京盲啞学校を退職する。結城が病に倒れたことが、友信が美術学校を退職、同年 4 月に盲啞学校に復職した理由の一つではないかと考えられる。盲啞学校では卒業生の吉川金造（1871-1939）が図画科助手をつとめていたが、結城に代わって狩野派絵画を教えるとなると、友信の再登場が望まれたのではないかと。友信は以来 70 歳で急逝するまで 16 年間指ヶ谷に通い、教え子の中から多くの日本画家、そして全国に相次いで開校した聾学校の美術教師が生まれた。

復職後の狩野友信は盲啞学校で狩野派絵画を教えるだけでなく学校行事にも積極的に参加している。山尾庸三郎で撮影された集合写真に友信は最後列中央、小西信八校長と石川倉次の間で写っている [図 1]<sup>8)</sup>。



図 1 「明治 29 年 7 月 10 日山尾庸三郎にて東京盲啞学校一同」  
狩野友信は最後列中央白い和服姿



図2 「明治31年11月ベル博士東京盲啞学校訪問」狩野友信はベルの右側3人目

また明治31年10月には電話の発明で知られるアレキサンダー・グラハム・ベルが、クラーク聾学校で教え子であった妻メーベルと二人の娘を伴い来日し、11月12日に東京盲啞学校を訪問し、聾啞教育について講演した。講演の内容は次の5点に要約され、日本の聾啞教育に影響を与えた。

- 1) 聾学校の教員養成機関を設置すること。
- 2) 盲と聾とを分離して各府県が必ず、一つの盲学校と一つの聾学校とを設けるようにすること。
- 3) 協会を設けて、聾児の教育については、「社会に刺激を与え、公衆の感情を興起することが、至極よろしくはないかと思う。」と激励したこと。
- 4) 聾学校において口話方式を採用すること。
- 5) 聾者の社会的地位の向上と社会の理解を広めること<sup>9)</sup>。

ベルの講演は聾者の社会的自立を促すものであり、図画科の卒業生はその技量を生かして就職した者も多かった。また明治36年の教員練習科設置、43年の盲聾分離はベルの提言に添ったものともいえよう。記念の集合写真に狩野友信はベルの右側に小西信八校長、高津柏樹と並んで写っている [図2]。

## 2. 『むつぼしのひかり』掲載 凸画「朝日」

狩野友信は東京盲啞学校で啞生に図画を教えていたが、盲生との接点もあったものとみられる。日本訓盲点字が制定されてまもなく発刊された盲生同窓会誌『むつぼしのひかり』（『六星の光』）第6号（明治37年1月28日発行）目次には「狩野友信先生筆「朝日」（凸画）」とある。掲載さ

れている凸画は頁下半分に船と波が微かに残っている。頁上半分には朝日があるのかもしれない、正月号の口絵に相応しい画題である<sup>10)</sup>。『むつぼしのひかり』は盲生同窓会によって明治36年6月に創刊された墨字点字併記の月刊誌で、点字が制定されたもののまだ読むものが少ない中であって、貴重な出版物であった。「六星」とは点字1マスが6個の点から構成されていることに由来する。いわゆるブライユ文字（訓盲点字）の存在を知った東京盲啞学校の小西信八が、それに準じた日本語五十音を表記する方法の開発を依頼したのが同校教諭石川倉次であった。なるべく三点二行の国際的な符号によるものになるよう工夫を重ね、石川の点字案が選定されたのが明治23年12月23日、官報に公示されたのが明治34年4月22日であった。今日の日本訓盲点字の始まりである<sup>11)</sup>。

東京美術学校勤務時代に友信は、築地在住のフランス人ピエール・バルブトーの求めに応じて、明治27年刊行の仏文版本『ラ・フォンテーヌ寓話抄』（1894）、翌明治28年『フロリアン寓話抄』（1895）の挿絵を手がけた<sup>12)</sup>。凸画という新しい媒体のための日本画も快く描いたのであろう。17世紀フランス文学の古典『ラ・フォンテーヌ寓話』と『フロリアン寓話』は時代を経て、多くの画家が挿絵を描いてきた。中でも異色なのは明治日本で印刷されたフランス語本文に、寓話の舞台を日本に移した木版摺りの挿絵を添えた和本である。いずれも左開き洋書の体裁であるが、絹糸の束で綴じた全2巻の和装本である。版により寓話の順序が異なるなど、通常の印刷物にはない多様性が興味深い。『フロリアン寓話抄』の仏文序文で、編者バルブトーは次のように述べている。

同国人からその才能を高く評価されているこれらの芸術家、狩野友信、梶田半古の両氏は、仕事にとりかかるとあたって、あたかも寓話の作者フロリアンがフランス人ではなく日本人であったのと同じくらい巧みに、ありのままに日本の生活情景を挿絵に表現できるように、わざわざ日本語に訳されたこれらの寓話の精神を深く理解してくれた。（高山晶訳）<sup>13)</sup>

『フロリアン寓話抄』第一巻第一話「目の見えない人と歩けない人」の狩野友信による挿絵は、いにしえの日本の情景そのものである [図3 カラー]。脚韻を踏むフロリアンの仏文は訳すと概ね次ようになる [図4 カラー]。

#### 目の見えない人と歩けない人

互いに助け合いましょう  
 そうすれば不幸の重みは軽くなるでしょうから  
 人が兄弟に施す善行は  
 その苦しみを和らげるでしょう  
 孔子がそのように言っています  
 皆その教えに従いましょう

孔子は支那の人々にその教えを伝えるため  
次のように語りました

あるアジアの町に  
二人の不幸な人がおりました  
体が動かない人と目が見えない人で、二人とも貧しかったのです  
天に向かって、死なせてくれと懇願しました  
でも二人の願いは叶いませんでした  
死ぬことはできません

体の動かない人は広場に横たわり  
誰にも憐れまれることもなく  
そのせいで一層苦しんでいました

目の見えない人にとってはすべてが危険なのに  
案内する者もなく、支える者もなく  
彼に懐いて目的のところへ連れて行ってくれる  
みずぼらしい一匹の犬すらいませんでした  
ある日のこと、目の見えない人が手探りで  
道の曲がり角までやってくると、すぐそこに体の麻痺した人がいました  
その叫び声を聞いて、心が動かされました  
不幸な人たちこそ、互いに同情しあうのです  
「私には私の災いがあり、あなたにはあなたの災いがあります、と彼は言いました  
二人の災いを一緒にしましょう、兄弟よ、そうすれば  
災いのおぞましさが減るではありませんか」  
「やあやあ、体の不自由な人が言いました、兄弟よ  
私が一步も歩けないのを忘れていませんか  
あなたはまさにそれが見えないのでしたね  
私たちの悲惨さを一緒にして何の役に立つと言うのでしょうか」  
「何にとは？と目の見えない人が言いました、まあ、聞きなさい  
我々二人にはそれぞれ役に立つ良いことがあります  
私には脚があり、あなたには目がある  
私があなを運びましょう、あなたは私の案内役になってください  
あなたの目は私のおぼつかない歩みを導いてくれるでしょう  
一方、私の脚はあなたが望むところへ行くでしょう

こうして、二人のどちらがより役に立つかなど  
我々の友情が決めることもなく  
私はあなたのために歩き、あなたは私のために見るでしょう」

(拙訳)<sup>14)</sup>

このような物語を聞いて、友信は遠景に美しい野山が描かれ、町行く人々が遠巻きにする中、歩くことができない人を背負った目が見えない人が街路を歩く色鮮やかな挿絵を描いた。あるいは東京盲啞学校で盲生と啞生が自然に助け合う様子を思い出したかもしれない。事実、日本点字が考案される以前のこと、楽善会訓盲啞院の啞生徒等は盲生徒のために凸字の鍼術教科書を作成したのである<sup>15)</sup>。

### 3. 盲啞両校留送別式 席画「友」

文部省直轄の東京盲啞学校は、盲生啞生それぞれの特性に応じた教育をするために懸案となっていた分離を果たし、明治41年(1908)に小石川雑司ヶ谷に東京盲学校校舎の新築工事が始まった。42年(1909)4月東京盲学校設立、翌43年(1910)4月指ヶ谷の旧東京盲啞学校校舎を改築して東京聾啞学校が開校、小西信八が校長に任ぜられ、両校の授業はそれまで通り行われ、次いで町田則文が東京盲学校長に任ぜられた。盲学校の新校舎が6月に落成し、夏休み中の移転を前に、7月9日に「閉校式並に盲啞両校留送別式」が催された<sup>16)</sup>。30年間ともに同じ学校で学び合い助け合ってきた盲啞生および教職員にとって別れることの寂しさは想像に難くない。その席で描かれたのが高津柏樹・狩野友信合作の「友」である〔図5カラー〕。

出席者500人余の席で描かれたこの60×123センチの紙本墨画は、「友」という漢字を雪の積もった松の枝で表現したもので、「六十八歳友信筆」の落款がある。画讀は盲人教育に尽くした黄檗宗の僧侶、高津柏樹(1836-1925)による。

盲啞両校留送別会の席上にて  
つひの世のことを  
かたみに遂けてこそ  
言はのこらぬ  
わかれず

七十四歳 柏樹<sup>17)</sup>

高津柏樹は訓盲院創設の明治12年より、京都黄檗山管長就任のため東京盲啞学校を離任する43年まで在職した最も古い教員の一人であった。こうして盲啞分離により東京盲啞学校の歴史に終止符が打たれたが、東京盲学校と東京聾学校はそれぞれ師範科を設け、全国の盲学校聾学校の教

師を養成する役割も果たすことになった。

#### 4. 狩野友信の教え子たち

東京盲啞学校・東京聾学校で友信に狩野派図画を学び、長じて一字拝領し画家になり、教師になった卒業生に触れたい。その筆頭といえるのが、母校の図画教師となった横江榮雄（号春正）である。明治14年（1881）東京生まれ、21年（1888）に築地の訓盲啞院に8歳で入学したが、一時休学、25年（1892）小石川指ヶ谷町に移転していた東京盲啞学校に再入学して、31年（1898）に卒業した。37年（1904）に母校の図画助手に採用され、以来昭和12年（1937）に退職するまで勤務した。その後も山尾庸三が初代総裁をつとめた日本聾啞協会の理事として聾啞者のために働いた<sup>18)</sup>。

酒井なつ（夏、号春花）は明治17年（1884）生まれ、24年（1891）2月に東京盲啞学校に入学したが、4月に一旦退学し、5年後の明治29年（1896）に再入学した。同年7月撮影の山尾庸三郎での集合写真〔図1〕には12歳の酒井なつが最前列右から3番目に座っている。明治34年（1891）卒業、37年（1894）絵画専修科を卒業した。なつは横山大観（旧姓酒井）の末妹である。東京美術学校を退官した岡倉覚三（号天心、1863-1913）が中心となって、明治31年（1898）に日本美術院が設立されると、なつは在学中から展覧会に出品した。日本絵画協会第9回に「雪中白鷺」、第11回に「竹林眠猫」（夏子名義）、第13回に「雨中牡丹」「鶴」「萩」、36年（1903）開催の日本美術院（地方巡回）奈良絵画展覧会では「垂絲桜」を出品している。39年（1906）には五二共進会に酒井春花女「春宮島ノ景図 金五円」「夕暮ノ図 金五円」「富士ノ暁 金一円二十銭即売」出品、と日本聾啞技芸会五二会出品絵画部目録にある<sup>19)</sup>。だが、父の酒井捨彦が結核に罹患すると、その看病によりなつも罹患し、43年（1910）9月に27歳で早世する。東京聾啞学校同窓会々報「口なしの花」第9号（明治43年）には、酒井なつの肖像写真とともに訃報が掲載されている。「年二十七歳嬢は発音を能くし、絵画も上手で性質は活発に最も賢秀常に能く交際を好まれた、今や早世せらる。誠に惜しむべきことである。」とある<sup>20)</sup>。

松本ろう学校々長をつとめた小岩井是非雄（号春泉）は明治27年（1894）松本市生まれ、10歳の時に東京盲啞学校に入学、15歳で尋常科卒業、図画科に入学した。『伝記 小岩井是非雄』掲載の集合写真〔図6〕はこの頃の撮影と思われる<sup>21)</sup>。

小岩井は17歳で図画科模範生となり、11月から盛岡高等農林学校教務課で掛軸等の制作にあたった。翌明治45年（1912）4月には私立岩手県盲啞学校嘱託教員となった。その後、東京楽善会勤務を経て、この頃結婚し、31歳で東京聾啞学校師範部図画科に入学した。34歳で同校を卒業すると、帰郷して松本女子求道会付属聾啞教育所嘱託教員となった。さらに私財を投じて松本聾啞学院を経営、同校が昭和23年に松本市立松本聾学校、25年に長野県立松本ろう学校となるのを見届け、31年に62歳で退職するまで講師をつとめた。

友信は晩年各地に卒業生を訪ねることも少なくなかったという。明治45年6月2日には駒込





図6 「東京盲啞学校図画科生徒一同 画伯：狩野友信先生、横江栄雄先生」

の丹波敬三薬学博士邸で友信の古希を祝う園遊会が催された。同年7月8日には東京聾啞学校行啓記念展覧会のため出勤し、翌9日に三女永塚綱を訪ねた水戸で中風のため倒れ、15日に逝去した。20日に東京の染井霊園で葬儀が営まれ、次女花兄の嫁ぎ先、鈴木家の墓所に墓石を建て埋葬された。花兄の女学校時代の習作が現存する [図7 カラー]。染井霊園の友信の墓には東京盲啞学校の教え子達から贈られたという口なしの木が植えられ、今も花を咲かせている。



図3 『フロリアン寓話抄』より「目の見えない人と歩けない人」狩野友信挿絵

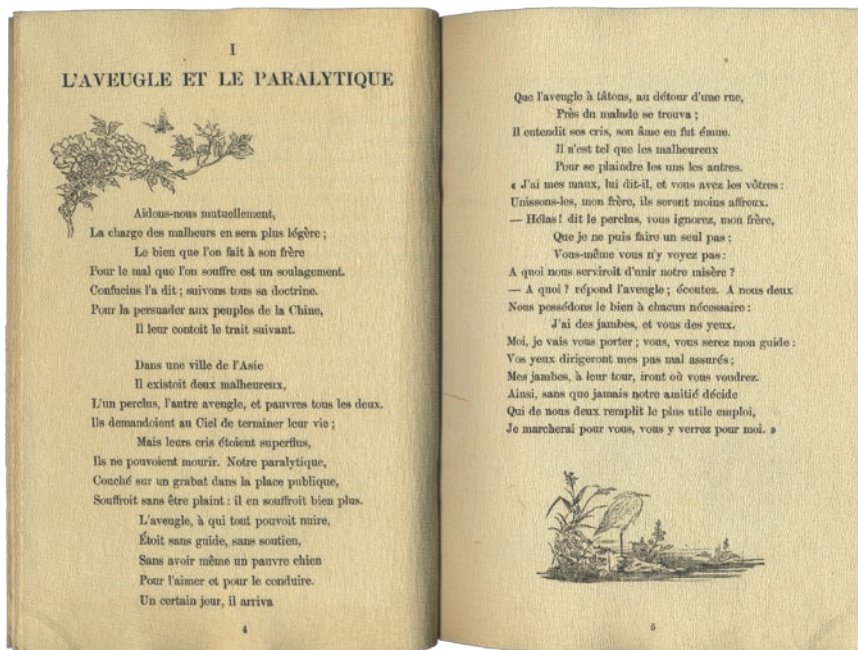


図4 『フロリアン寓話抄』より「目の見えない人と歩けない人」本文

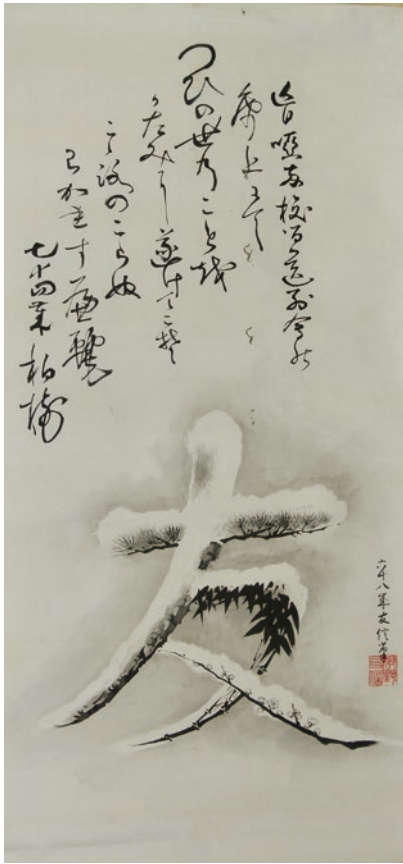


図5 高津柏樹・狩野友信合作「友」



図7 狩野花兄筆『女郎花と桔梗図』

## 付記

本稿をまとめるにあたり、多くの方のご助言とご教示をいただいた。特に高山晶氏、筑波大学附属聾学校教頭（当時）馬場顕氏、筑波大学附属視覚特別支援学校教諭・資料室担当（当時）横山エミ氏、筑波大学附属聾学校同窓会事務局峯美紀氏、同会理事岡本洋氏、松本ろう学校同窓会会長内田博幸氏には心から感謝申し上げます。

## 注

- 1) 東京藝術大学資料室所蔵の「東京美術学校助教授 狩野友信履歴書」による。
- 2) これまでに狩野友信について以下の論考を発表してきた。
  - 1) 「狩野友信―明治を生きた最後の奥絵師（1）生いたち・修行・奥絵師時代・作品」*LOTUS* 19号 日本フェノロサ学会機関誌 1999年4月。
  - 2) 「狩野友信の明治―奥絵師から日本画教師へ」『近代画説』9号 明治美術学会誌 2000年12月。
  - 3) 「狩野友信―明治を生きた最後の奥絵師（2）来日外国人画家との交遊」*LOTUS* 22号 日本フェノロサ学会機関誌 2002年4月。
  - 4) 「パリの欧文挿絵本」『ことばと人間』10号 立教大学言語人文紀要 2008年12月。
  - 5) 「シカゴ万博と鳳凰殿」『ことば・文化・コミュニケーション』2号 立教大学異文化コミュニケーション学部紀要 2010年3月。
  - 6) 「アメリカに渡った掛物絵一万延元年遣米使節贈答品」『ことば・文化・コミュニケーション』4号 立教大学異文化コミュニケーション学部紀要 2012年3月。
- 3) 『東京教育大学附属聾啞学校の教育』（昭和50年 東京教育大学附属聾啞学校）所収「アレキサンダー・ベル博士来日 明治31年（1898）10月」p.45。
- 4) 岡本洋未発表論文「閨秀画家 春花酒井なつ大先輩 美術界と聾啞界との関係」p.3。
- 5) 前掲履歴書には訓盲啞院1ヶ月手当8円給与とある。
- 6) 前掲履歴書による。
- 7) 前掲履歴書によると両校雇の際、月俸は東京美術学校より20円、東京盲啞学校より10円支給されたが、東京盲啞学校を退職後は東京美術学校より35円が支給された。
- 8) 『筑波大学附属聾学校同窓会 同窓会史 創立120周年記念』（平成23年、筑波大学附属聾学校同窓会）p.31。
- 9) 『東京教育大学附属聾啞学校の教育』p.68。
- 10) 2014年の調査に先立ち、筑波大学附属視覚特別支援学校に狩野友信関係の資料について問い合わせたものである。
- 11) 『盲聾教育八十年史』pp.51-53。
- 12) 狩野友信が挿絵を描いた欧文挿絵本については拙稿「パリの欧文挿絵本」（2008）を参照されたい。
- 13) 高山晶『ピエール・バルブト―知られざるオリエンタリスト』p.53。
- 14) 拙訳に高山晶氏が加筆訂正してくださったものを参考にした。
- 15) 『盲聾教育八十年史』口絵に凸字本『療治之大概集卷之上』『楽善会訓盲啞院 啞生徒等製造』の写真2枚が掲載されている。
- 16) 明治43年11月発行『口なしの花』第9号掲載「盲啞学校留送別式」pp.65-69。

- 17) 鈴木力二『東都盲人教育事始め—高津柏樹の一生』p. 3 に次の現代語訳掲載。  
永久に住むこともできないこの世のことを、  
私と皆さんとお互いにやりとげていこう。  
後に悔いの残らないさっぱりした別れにすべきである。
- 18) 『筑波大学附属聾学校同窓会 同窓会史 創立 120 周年記念』（平成 23 年、筑波大学附属聾学校同窓会）p. 30 による。尚、横江榮雄の名の読みは正誤表により「しげお」に訂正されている。
- 19) 岡本洋前掲未発表論文 p. 2。
- 20) 復刻『口なしの花』『殿坂の友』東京聾啞学校同窓会誌 第 1 巻（2012 年 筑波大学附属聴覚特別支援学校）p. 446。
- 21) 『伝記 小岩井是非雄』p. 20。

### 主要参考文献

- Florian, J. P. Claris de. (1895) *Fables choisies de J.P. Claris de Florian illustrées par des artistes japonais*. Sous la direction de Pierre Barboutau. Paris: Librairie Marpon & Flammarion. (著作権 佛国人 馬留武富 東京市築地居留地五十一番館 明治二八年十月 秀英社印刷)
- 鈴木力二 (1983) 『東都盲人教育事始め—高津柏樹の一生』
- 高山晶 (2008) 『ピエール・バルブト—知られざるオリエンタリスト』慶應義塾出版会
- 筑波大学附属聴覚特別支援学校編 (2012) 『復刻『口なしの花』『殿坂の友』 第 1 巻 東京聾啞学校同窓会誌』
- 筑波大学附属聾学校同窓会 (2011) 『筑波大学附属聾学校同窓会 同窓会史 創立 120 周年記念』
- 東京教育大学附属聾学校 (1975) 『東京教育大学附属聾学校の教育—その百年の歴史』
- 東京盲啞学校盲生同窓会 (1904) 『むつぼしのひかり』第 6 号
- 長野県松ろう学校同窓会 (2001) 『伝記 小岩井是非雄』
- 文部省 (1958) 『盲聾教育八十年史』
- 山田久美子 (1999) 「狩野友信—明治を生きた最後の奥絵師 (1) 生いたち・修行・奥絵師時代・作品」日本フェノロサ学会機関誌 *LOTUS* 19 号
- 山田久美子 (2000) 「狩野友信の明治—奥絵師から日本画教師へ」『近代画説』9 号 明治美術学会誌
- 山田久美子 (2002) 「狩野友信—明治を生きた最後の奥絵師 (2) 来日外国人画家との交遊」日本フェノロサ学会機関誌 *LOTUS* 22 号
- 山田久美子 (2008) 「パリの欧文挿絵本」『ことばと人間』10 号 立教大学言語人文紀要
- 山田久美子 (2010) 「シカゴ万博と鳳凰殿」『ことば・文化・コミュニケーション』2 号 立教大学異文化コミュニケーション学部紀要
- 山田久美子 (2012) 「アメリカに渡った掛物絵—万延元年遣米使節贈答品」『ことば・文化・コミュニケーション』4 号 立教大学異文化コミュニケーション学部紀要